

ビジネス文書の書き方読本(4)

一産業日本語研究会 ライティング分科会編について一

On “How to write business documents Part 4 / Writing Subcommittee Edition”

東京外国語大学 名誉教授

佐野 洋

株式会社東芝を経て、1996年から2026年まで東京外国語大学に在籍。

✉ sano@tufs.ac.jp

1 はじめに

1.1 書き方読本

産業日本語研究会・ライティング分科会（以下、「ライティング分科会」）は、ビジネス文書¹を念頭に置いた書き方の指南書（マニュアル）の作成を目指している（[1]、[2]）。マニュアルが目指す筆法は、出来事や事実の整合的な列挙にとどまらず、書き手の評価や価値判断を合理的もしくは道理的に記述する。この表現法は、読み手の行動を変容させることを狙っている。その狙いとは、読み手に伝えたい中身を信じてもらうこと―読み手の叙述内容に対する印象の改善（信念状態の肯定的な変化―信頼感や安心感）である。伝えたい事柄が拔かりなく受け入れられ、内実に納得してもらうことで、書き手が望む動きが読み手に生じ、それと同時に、書き手が望まない行動が抑制される。

作文という叙述運動の中で、事実としての諸々の出来事と、それら出来事についての評価や価値判断の二面性が調和することを書き方方法に含めるため、ライティング分科会は、昨年度（令和7年度）までに「思考する」という認識活動において使われる語や句、文の意味、つまり記号連鎖が持つ明確な違いである概念と観念の形成過程とその表象化の特徴、そして概念や観念の事態展開²への表出手段を、以下に挙げる観点に焦点をあてて議論を重ねてきた。

1 [21]：8-9頁で範囲限定されるビジネス文書。

2 [21]：21-22頁で示される事態概念。

第一に、物質世界の存在は、どのように認識世界の实在（心理表象）として把握されるのだろうか（物事の見方）。第二に、把握された心理表象を外化する手段―とくに、实在の象徴（記号）化と記号配列（推論）は如何に為されるのか（考え方）。第三に、書き手の叙述事態の表現展開の仕方と読み手の信念の更新とは、どう影響しあうのか（語り方）、である。

1.2 書き方技法と思考の様式

1.2.1 物事の見方

内外環境への生理反応の仕方や知覚の種類は生き物ごとに違い、同じ生き物でも信号の受け止め方や解釈（神経表象）は経験によって異なる。人は記号過程（[3]）を経て物事の实在の意味を記憶しているが、人の世界の分節の仕方（心理表象の記号化）にも違いがある。井筒は『言語と呪術』（[4]：148頁）の中で『われわれは言語が引いた線に沿って「現実」を分割し、その結果生じた区分は自然な、すなわち客観的な分節であるとみなす傾向にある』と核心をついた指摘をしている。

ライティング分科会は心的表象（あるいは相³）から議論を始め、实在の記憶（世界の分離化）では、心理時空間の標本化と量化の仕方の違いから、2つの性格の異なる思考様式を生むことを議論した。心的離散化としての標本化（不動点と不変点）は、量化（数え上げと関わり合い）の違いに深く関り、形姿・外形实在のモノ（位置変化の動き）と内実・役割实在のモノ（質変化の動き）

3 唯識思想の相分と見分（[10]：56頁）の相分にあたる。

の二種類ある（[5]）ことを提案した。

1.2.2. 考え方

理に適う筋道が考え方である。物事や出来事についての理解を深め、多角的な視点で考えを巡らすこと―熟慮することで、実在の信じさせ方が明確化する。原因や理由が判明する、原因・理由と結果の結びつきが明らかになるなど推論や類推を用いて、その道筋を明らかにするのであるが、ライティング分科会は、合理的な手続きと道理的な手続きがあることを主張している（[6]、[7]）。

推論や類推は思考運動だから、その心理表象は動きの概念に深く関連するに違いない。そこで本分科会は、モノと同様に動きも弁別された纏まり（分量）であるとする立場から心理時空間の量化の仕方の違いに着目することで、動きを象徴する2つの抽象化された変化―位置変化と質変化を提案している（[1]）。

[1]で示したように、不動点を離散化の尺度として量化した位置変化の動きでは、数え上げられた（孤立した）モノ世界を描き、ある出来事とより後の出来事間の推移（演繹的な推論）を好む。この思考では、概ね確定的に結論付ける傾向のある合理的な手続きを筋道とする。

一方で、不変点を使って量化した質変化の動きでは、関わりあった（互いに依存する）モノ世界が描かれる。ある出来事とより前の出来事との関連（帰納的な推論）を好み、総じて仮定的に結論付ける傾向のある道理的な手続きが筋道となる。

出来事間の在り方に対する認識の仕方が言語的世界（[3]：32頁）の意味として、実在性の概念の違いに相対し、より強固にその因果性の偏向（時間と場所の近接性（[8]：35頁）や縁起の理（[9]：24頁））があることが分かった。末松の『日本思想考究 論理と構造』（[10]：3章）によると「対立的な合理性」と「全体的な道理性」の違いであるという。

1.2.3. 語り方

判断の表出の仕方―出来事連鎖を伝達する具体的な叙述表現が語り方である。読み手が納得し（信念更新）がなければならない。やり取りされる情報には方向性があるから、この方向性は向社会性の性格を帯びる。ライティング分科会では2つの向社会性を持った文章の型を筋書きの違いに対応させて、説得（「がある」）型パラグラフと共感（「である」）型パラグラフと呼び、二分している（[11]）。

前者は、結論を判断してしまうことで相手を説得する特徴がある。モノの動きが位置変化に由来するから、身体的な動作・行為や物の移動を表す動詞が筋書きの中で中心を占める。後者は、結論を判断し切らず相手に共感を求める。モノの動きは質変化として示すので、心理的な感情・品評や物の状態を表す述語が筋書きの軸をなす。

1.3 思考の様式と表現

書き方技法としての物事の見方、考え方、語り方は、創られる記憶、推論と見極め、そして信念更新（説得と共感）という思考の様式に相応する。

ライティング分科会では、思考の様式と文章表現との結びつきをより具体的に検討するため、池上（[12]）が指摘した、言語タイポロジーとしての「する」と「なる」の違いを踏まえて、日本語における事態叙述の傾向性である「なる」型（[12]）の表現が、共感（「である」）型パラグラフを構成しているとの作業仮説を置き、長年にわたり議論している。

心理時空間の量化の違いが、表象化された動きの特徴につながるとする考え方はモノの見方に由来し、モノが個別自立しているのか、相互に依存しているのかであり、量化の見地に立つと、数え上げるのか、あるいは関わり合うのかで隔てられる。

ライティング分科会は後者の「関わり合い」の思考とは如何なる特徴があり、どのような性質であるのかについて、レンマ的思考（[13]、[14]）の理解が欠かさないとの認識から議論を行い、それら概念を生み出してきた思考様式と言語表現との繋がりを探ってきた。

量化（数え上げと関わり合い）という観点から、前節までに挙げた思考の様式―創られる記憶、推論と見極め、信念更新（説得、共感）の議論を進めている。

1.4 本稿の構成

ライティング分科会が共感（「である」）型パラグラフと呼ぶ文章表現が、レンマ的思考に拠ること、日本語の文法特徴とも整合していることが察せられる。レンマ的思考は東洋的である（[13]、[14]、[15]）との指摘から、本稿では、本分科会の議論の紹介―心理時空間の連続性と世界の分離化という考え方の根拠をより明確にするために、数量と判断根拠、連続についての抽象概念がどのように生まれてきたのか（その過程）を、日本語が「なる」型に偏り、

共感型パラグラフを産出しやすいという考え方から、レンマ的な思考の様式に関連付けて概観する。

以下、2章で各思考の様式を概観するが、数量の概念も含めて人口動態（[16]）と関連付けてみたい。というのも言葉のやり取りは人の集団内（複数の人間間）の営みであるから、指示的でない、類像的でない抽象概念のとくにメタ的な抽象概念の記号化には、鈴木⁴の考察（[17]）に啓発されて、集団規模に相応して、やり取りする概念の稠密化が強く関与したのではないかと推測する⁴からである。

3章ではLLMを利用した文章変換ーレンマ的思考様式の文章からロゴス的思考様式の文章への実施例を示す。4章はまとめである。

2 数え上げと関わり合い

2.1 数量、否定、連続

数学者の志賀が指摘するように、物事を1つ、2つと数える数は、『数えられる対象から離れた抽象概念で、加えて、生成的な概念であって無限を含む』から（[18]：6-21頁）、知覚経験できる具体物を手掛かりとして抽象化された概念とは違う。さらに志賀は、「数のはたらき」（[18]：5章）の中で、『数は演算を許し、量は変化を許す。』と述べており、数と量は質的に異なる考え方である。

横井は日本語マニュアル（[19]）の説明の中で、言葉の役割のひとつに否定表現を挙げ、存在しない、あるいは起こらない（知覚認識できない）ものごとについて語ることができる言葉の記号性を挙げている（8頁）。否定の概念は創造である。

連続（あるいは無常）もまた知覚経験できない。実利的な現実世界で動きの概念を一般化（分別）する手段として、本分科会が採るところの心理時空間を標本化（して量化）するという考えは、ベルクソン（[20]）の不動点と不変点という持続についての分析に従っている。

2.2 数の言葉と思考様式

数は数えられる対象からは推測できない抽象概念であ

るだけでなく、数と数の間に順序があることや数そのものが操作の対象になる（[18]：5章）など、一般的にいう物事の本質を捉えた抽象概念とは異なる。

人類学者であり言語学者であるエヴェレット（[21]）によれば、数は人の発明品であるという。「1」「2」「3」については脳内に『神経生物学的な基盤がある』（[21]：210頁）けれども、それ以上の数の概念は知覚経験できない。石器時代のもものとみられる石や骨に刻まれた幾何的紋様など夥しい発掘の調査結果や、数の言葉を持たない言語話者へのフィールド調査（[21]：119-150頁）から、このような抽象概念は『誰かの閃きに』によって考案されたと推測している。そして、数の（概念を記号化した）言葉が人の思考のプロセスに違いを生むと結論している（[21]：205頁）。7万年以上前のブロンボス遺跡で発見された石の模様（幾何図形）（[22]：57頁～68頁）は神経表象の象徴化であり、数の概念が記号化されたのかもしれない（[21]：259-267頁）。

このように数量の概念の創発は移住（狩猟）の時代であったと考えられ（[21]：32-63頁）、農耕が始まった時期よりも古い。7万～6万年前に（アフリカから）ヒトは移住をはじめたといわれ、大塚によると、その頃の人口は50万人？と見積もられている（[16]：58-84頁）。さらに彼は（矢尻に似た石器の）尖頭器の発見から『…ヒトが野生動物を積極的に狩猟し…』と述べ、狩猟技術の向上と肉食の増加を指摘している。集団にあっては、資源分配の際に数量の概念は必然だし、その正確性は資源量が増すほど、分配にあずかる構成員が多いほど重要となる。

2.3 風土と思考様式

集住を始めた頃から宗教発達した時代を辿り、2つの思考の様式ー『問題を論理に照らし二者択一として判断を強行する直線的世界観のロゴスと、経験を超越から判断を中止する円環的世界観のレンマ』（[17]：161-162頁）ーを思想性の観点で捉えしたのが地理学者の鈴木（[17]）である。紀元前500年頃の宗教発達した時代を遡り、ロゴスとレンマに至る思考の発達を地質学的な視野から辿っている。最終氷河期（1万8千年前）以後の気温上昇の過程、つまり1万2000年（[16]：85頁）ほど前からの人々の考え方（思想）の変遷を、とりわけ宗教上の儀式遺構や気候風土（乾燥地域と森林地域）の

4 個別・具体的な概念が集まってくると汎化概念ができるが、創造や創発に拠るような概念に拠って一気に思考空間が広がることは発明史が示すところである。

連関から議論を展開した(思考様式の宗教性)。暦(離散数)の解釈、開墾による耕作地の整備(計測)や水量(連続数)の把握など、農業革命([16]:85-111頁)は数の言葉なしには実現し得ないだろうから、その頃までには数の言葉は体系化されていたと思われる。

鈴木([17])は、農耕が拡大するに従い、環境制約や気候の変動が作物の収穫量を左右するようになったことから、『…自分の力を超える力の存在を強く意識するようになった。』([17]:51頁)とし、超越者⁵という抽象概念が集団生活の中で大きくなったという。さらに超越者を絶対者と絶対(ぜつだい)⁶者に分けて解説し、いずれかの者への思考の偏向を気候風土に結び付けたもので、『乾燥地域では多神教から唯一神への進化が見られ、森林地域では多神教化への退化が見られる』という([17])。古代文明の発達からの経緯を地理学的な視点で辿り、集団の共感的理解という思考の様式を宗教観の子細な分析から集団が居住する気候・風土に拠るものであるとの結論に至る([17]:97-99頁)。

鈴木は(論考が出版された1976年の時代を背景として)、『唯一神の理解が…ほとんど地球の全体を覆った』とし、日本が『世界でも、唯一神の理解が、もっとも遅れているところのひとつである。』と述べ、遅れたことは問題視せず、次第にロゴス的な思考に近づくともていえる([17]:163-164頁)。

大塚によると、定住と農耕が始まるのは、1万2000年前で500万人の人口であったという([16]:85-131頁)。穀類や根菜類に加え、家畜動物が出現する。農耕によって人口支持力が向上し、人口が集中する都市が生まれた([16]:122-131頁)。

2.4 否定とロゴス、レンマ

ここ今を起点に、より後に何を選択するのか、ここ今の状況を生じさせた原因を、より前の何に求めるのかは一般に推論と呼ばれ、既知の物事から未知の物事を知る手立てである。推論される複数の可能性から何れかを選択(つまり判断)する思考行為に於いて、判断根拠である否定(という抽象概念)の果たす役割は大きく、肯定

か否定かという二値判断だけが論理ではない。

思考様式の論理性的の観点で、哲学史の専門領域から西洋と東洋の論理の違いを議論したのは山内(『ロゴスとレンマ』)である([13])。『ロゴスとレンマ』はその内容が難解で、我々には哲学の知識も足りないので専門家の見解を紹介する。哲学者のジャンル([23])によると、「ロゴスの論理」に対して、「レンマ⁷の論理」を構築しようとした山内は、龍樹([13]:72頁)のテトラ・レンマに、原因と結果の不可知性の解釈を求め、『縁起の結合の論理は、「情理」(感情の合理性)によるものである』といい、推論を根拠とした判断を中止せざるを得ないことを説明する。彼は『何らかの認識対象を把握しようとする時、ひとは誰であっても、ある事情のもとで把握する。どんな事情のもとで把握されるかによって、認識対象は、異なる側面を見せる可能性がある。』([23]:481頁)ことを指摘する。判断に臨み肯定でもあり否定でもあるということだろう。

ジャンルは『山内は、関係する物事のこの同時性は、時間的な関係ではなく「空間的關係」の特色であると考え。それゆえ、因果性は時間的であるのに対して、縁起は空間的である。』([23]:143頁)こと、さらに『因果の關係は「自然的關係」であるのに対して、縁起の關係は「人間的關係」である。』と説明する(同頁)。

量化について山内は『数えるということは一定の順序により次序に従ってなさねばならぬ。』([13]:22頁)と言い、『計量は人間的操作であり、順序は論理的序列あると言っても、自然数はむしろ二つの要素から成り立つことを思えば共に欠くべからざるものであることは明らかであろう。』([13]:23頁)と指摘する。なお、仏教学者で思想家の中沢は、仏教(華嚴宗)を基礎にレンマ思想を学問として昇華させようとしている([14])。

アリストテレスや龍樹が生きた時代は紀元前300年から紀元後200年ほどの時代で文明の成立以後のことである。その頃は、大塚によれば「第一の人口循環」の終わり頃で人口は1.5億人([16]:161頁)であるという。因みにアリストテレスは都市(アテネ)に住み、龍樹は南インド、クリシュナ川の上流で過ごした⁸。文

5 知覚経験できない抽象的な一者。

6 仏教用語で、他との比較対立を絶していること。他に並ぶものがないことをいう。

7 レンマは「具体的に直接にものを把握する」([12]:68頁)ことで、直観的な世界の把握の意味。

8 百科事典マイペディア「龍樹」の項目

明が起こったとされる 5500 年前の人口は 1000 万人と推定されている（[16]：132-160 頁）。

2.5 連続の概念と思考様式

志賀は『数はもともと、ものの個数を数えることと、長さや重さを測って比べてみることから生まれてきた。これはいわば‘数の世界’と‘量の世界’という、数学が対象とする 2 つの世界を生むこととなった。』（[18]：34 頁）と説明する。2 つの世界は、注目するはたらきの違いにも現れる。志賀によると、微分・積分学の発達の経緯の中で、その誕生においてニュートンとライプニッツが、異なる思想から無限小の概念を捉えていたことを紹介している（[18]：8 章）。両者には、思想・信条の対立があったわけで、『ニュートンは、変量は絶対時間の中で動く量としたが、ライプニッツは変量ははたらきの奥にモナドを見、それを無限小量として記号で dx 、 dy のように表した。』（[18]：205 頁）という。

連続性の概念の発達の中で、絶対空間と絶対時間を主張したニュートンと、それに対抗して時空の関係説を唱えたライプニッツの書簡でのやり取りを、科学哲学史として内井が紹介している（[24]：第Ⅱ章）。内井によると連続する絶対時間に対してライプニッツの時間論は『物体の配置にほかならない瞬間、瞬間がまずあって、それらが（神の作った）法則にしたがって次々と起こるとき、それが「時間関係」を生み出す。』（[24]：47-49 頁）ことであるという。仏教の刹那滅論が想起される。

大塚によると、「現代の人口」循環の半ば（1600 年頃）は、感染症が流行し人口増加率が停滞した時期で、人口は 5.5 億人（[16]：178 頁）ほどである。大塚の分類では、現在は 265（276⁹）年前に始まった「第 4 フェーズ」で、その頃の人口は 7 億 2000 万人であった（[16]：194-236 頁）。2025 年の段階で、総務省統計局の資料¹⁰によると人口は 82.3 億人に達している。

2.6 量化と言語表現

量化という一視点で、数え上げと関わり合いの思考の様式を引用をもとに概観した。数量の概念、判断根拠の

否定の概念、連続の概念のそれぞれで創られてきた 2 つの世界観には越えられない隔たりがある。

主語－動詞と主題－叙述の構造の違いは、様々な観点から議論されるが、数え上げと関わり合いの視点からは、対立的な個物の生起順序としての序列化（ロゴス的で判断し切ること）に由来するか、相互依存する個物の関係の強度としての相対的な位置づけ（レンマ的で判断を中断すること）に拠る認識の違いの反映だろう。

さらに叙述態度の違いでもある。物事の数え上げでは、事態把握において、我々の（主に）視知覚の認識の等価性を前提に、それら全ての物事に対して順序関係を明らかにする－因果性で結ぶ叙述の仕方である。一方、物事の関わり合いは、我々の記憶を含め知覚の認識の差異性を前提に、物事間の一部で順序関係を明らかにする－縁起性で示す叙述法である（全ての物事間で順序が分からない代わりに、共起性を示すことができる）。

筋書きの違いで区分される文章（パラグラフ）の型についていうと、説得（「がある」）型パラグラフが、数え上げる世界－ジャーナル（[23]）のいう自然性指向の理解と伝達に適しているとするれば、共感（「である」）型パラグラフは、関わり合う世界－人間性（あるいは社会性）指向だろう。

時間軸上に出来事表現を並べるのはロゴス的である。出来事間の生起順序を絶対的な時間軸上で捉えるか否かである。これは、いわゆる絶対時制と相対時制の違いで、前者は連続する時間軸を前提に発話時の出来事発生時を起点に絶対的な前後関係を表現する。後者は、出来事の発生時との相対的な順序を表現する。

3 文章変換

3.1 「である」型から「がある」型へ

ライティング分科会では、変換規則の作成で踏いた文章レベルの特徴付けを、説得（「がある」）型文章と納得（「である」）型文章として分けて、動き（出来事）の特徴を位置変化表現と質変化表現として整理した。説得型文章では、互いに孤立（独立）したモノ群が在って、それらが位置変化することで関係性が確立し叙述が展開される。一方で納得型文章は、互いに依存したモノ群に関係が在り、関係選択によってモノの性質が決まるよう叙述が進展する。そして日本語は共感型の文章記述に向い

9 引用した本の出版は 2015 年。

10 総務省統計局「世界の統計 2026」：14 頁。

ている、あるいは適しているとの見解である。

さらに、ビジネス文書を外国語に翻訳しやすい、あるいは分かり易く伝えるという観点から、「である」型表現を「がある」型表現へ変換する書き換え規則の策定を進めてきた。

そして、これまで議論しまとめようとしてきた変換規則をプロンプトの指示に換えて、昨年度（2025年度）、LLM（大規模言語モデル）を使い、限定的な範囲ながら共感型文章を説得型文章に書き換えさせる試みを行った。

3.2 LLM を使った書き換え

文書・文章ライティングのプロセスモデル（[19]：14頁、図1.3）は、文章を状況－母語話者どうしの通話（情報伝達）なのか、翻訳を伴う他言語話者への通話なのか－に合わせて、思考過程の記号表出である叙述の仕方を整合させると言いたいのである。人が文章を書き換えようが、AIがプロンプト指示に従って生成しようが同じ結果を生み出せば構わないし、文章の産出効率が上がるなら積極的に受け入れるべきだ。

表1は、2章で紹介した量化の視点からみた思考の様式変換（関わり合いから数え上げ、あるいはレンマ的思考からロゴス的思考への表現変換）を進める過程について、「文書・文章ライティングのモデルプロセス」（[19]：14頁、図1.3）と比較している。

表1

思考の様式（[13]）	ライティングのプロセス
関わり合い	「試みる/表わす日本語」
関わり合い、数え上げ	「伝える日本語」
数え上げ	「訳せる日本語」
数え上げ	「伝える英語」 「伝える外国語」

LLMは、関わり合い（レンマ的－全体把握する直観的な発想）の文章表現を、数え上げ（ロゴスの－個別化された出来事の序列を表す発想）の文章表現に瞬時に変換する。この直線的世界観（[17]：162頁）で構造化された言語表現は、思考様式が類似する他の言語に翻訳されても誤解なく伝わる。我々は、まず自由にレンマ的な思考様式の発想で文章を記述し（「試みる/表す日本語」）、それをLLMに書き換えさせ、継いでLLMに翻訳させて伝えることができる。

3.3 表現変換（プロンプト）例

大まかに言って、共感型文章－自己と他者との関係からなる相対表現群の並列配置（配置の序列は縁起性に拠る）を、説得型文章－自己と他者との対立による絶対表現群の直列配置（配置の序列は因果性に拠る）に変えるよう指示する。加えて、ビジネス文書に特化した指示手続き－理由ではなく原因の明示とその原因の条件部と作用部へ分解することが特徴である。

具体的に、LLMを利用して文章書き換えを試行したプロンプト（書き換え指示）例を挙げる（詳細は[2]（46-59頁）を参照）。

1. 外部から介入・操作可能な機能表現に置き換える。
2. それらの機能同士が、どの条件下で、どのように相互作用しているかを、因果構造として記述する。
3. 因果構造は以下の要素を必ず含める。
 - ・条件：発生状況や制約
 - ・作用：機能間の影響
 - ・結果：評価につながる現象
4. 主観的な感情語を使用せず、操作可能な表現に置き換える。
5. 解決策や改善案は記述せず、あくまで介入・操作可能な問題定義文としてまとめる。

例えば、「自宅マンションのエレベータが来るのが遅い。」という文は、「エレベータの到着までに待機時間が発生している。」、「エレベータの到着時点が事前に確定していない。」、「同時に利用する住人の数により待機時間が変動する。」と書き換えられ、さらに「同時に複数住人がエレベータを利用する場合、待機時間が増加し、エレベータの到着が遅れる状況が発生している。」あるいは「エレベータの到着時点が事前に確定していないため、スケジュール調整ができず、待機時間のばらつきが生じる状況が発生している。」という表現に変換された。

今後は、多様な文章で変換試験を実施すると共に、変換された文章品質を確認した上で、LLM利用を前提としたライティング規則として整理する予定である。

3.4 表現変換の考え方

書き換え指示例に挙がる幾つかの主要な語を説明する。

3.4.1. 機能表現

機能表現は、時間幅を持つ過程的な概念・観念表現を

いう。まず「外部から介入・操作可能」であることは、互いに独立した物事（ロゴスの）であり、他動詞の目的語のような被動の対象でもある。「過程的」という指示で動きの表現の他動性を強調している。必然的に介入者、あるいは操作者は表現されるから、文章表現にあっては主語と目的語は明示される筈である。

3.4.2. 因果構造

数え上げられる出来事間に時間軸上の序列を定めることが因果構造の表現指定である。出来事を順序立てて並べるために、時間と空間の近接性が用いられる。その際、ビジネス文書に特化した指示として、「どうして（理由）」ではなく「なぜ（原因）」に伝えるよう、原因を明記させ、その原因の条件部と作用部へ分解させた上で因果連鎖を言語表現として明示させる。

3.4.3. 感覚語

感覚語は、例えば、「いらいらする」「不快だ」「嫌だ」など身体的感受表現で、内在性の自己認識（[25]）、つまり知覚による内界の受容に基づく記述である。記憶の表象は、言語表象だけでなく、視覚、聴覚、嗅覚や触覚などの様式横断の結果として表象化されている（[26]：69-105 頁）。これらは直観的な世界把握の（レンマ的）意味に対応する語であって、変換にあたり感覚語を使わないことを直接に指示する。

なお、5 の指示は文章化される複合事態の過程を強調して表現するように指示するものである。

3.5 変換における課題

前節までに示した LLM を使った事例は、考え方の思考様式が決定した特定の書き換えタスク（文章変換）の自動化に有効であることだが、人が意識的に思考変換の工夫を重ねることの必要性がなくなることはない。評価や価値判断は意思決定の一つであり、意思決定における理由の選択には様々なバイアスが介入するし（[27]：100-125 頁）、多くの指摘があるように認知への文化の介入があることが示されている（[28]）。さらに直観や情動などが概念形成や判断に及ぼす影響（[29]）は未だ本分科会の議論の遡上に上がっていない。

量化（数え上げと関わり合い）という一面からの議論の範囲ながら、生成 AI 時代の文章技能について言えば、必要なことは思考様式の意識化と書き換え指示の確度である。生成 AI を利用することで事実の整合的な列挙な

ど産出を含め文章変換に要する時間の効率化が進む。一方で、書き手の評価や価値判断を合理的もしくは道理的に記述する箇所は思考様式の偏りが生じやすい。したがって、人に求められるのは事実内容を正鵠に表す能力だけではなく、読み手に納得される思考様式を見極め一説得なのか共感なのか、納得、つなわち信頼感と安心感が得られるような語り方であるべきである。

レンマ的な全体把握に偏る思考の様式を抱える文章から、ロゴス的な出来事連鎖を表す思考で解釈できる文章への変換について 2 つの段階を考えるべきである。文章の表現上の変換手続きを LLM に任せ、我々は道徳判断や倫理判断が必要な個所の表現に焦点を充てるべきであり、文章を生成するため適切にプロンプトを顕わさなければならない。

変換結果の適否を分けるのは、LLM の文章生成の性能よりも、書き手がどれだけ書き換えさせた文章内容に関わるのかの度合いである。

ビジネス分野に含まれる多くのタスク（企業間、企業と小売り、小売りと消費者、発注と受注など）はそれぞれ文脈の性質が異なるので、思考の様式の見極めと表現選択は書き手の判断に残る（委ねられる）だろう。

4 おわりに

4.1 考の仕方と言語形式

心理時空間の量化の違い（数え上げるのか、関わり合うのか）が、動きの表象特徴につながるとする考え方を、ロゴスとレンマという思考の様式の違いに関連させて、抽象概念（判断根拠、超越者、数量など）を概観した。これらの検討をもとにライティング分科会では、言語表現に用いられる叙述の特徴を分析し、レンマ的な言語特徴を持つと考えられる日本語の思考様式を整理している。

ただ我々は、人の思考様式は母語によって強く規定されるとする言語決定論的な立場を採るわけではなく、日本語の表現特徴がレンマ的であると考え、文章変換を考え易いという実利に根差した考えを採っている。

人の思考偏りのある文章の（レンマ的な思考の表出からロゴス的なそれへの）変換について、LLM による文章の自動書き換えを試みた。未だ試験的な段階であり、プロンプトの一般性は十分でないことから、引き続き精度向上を継続してゆく。なお、LLM による文章の自動

書き換えの試みは、書き方マニュアルの方向付けを変えようとしたわけでない。本稿では、書き方マニュアルに在る基本の姿勢を持続させながら（目下の）ライティング分科会の活動を紹介した。

4.2 本分科会の立場

本分科会は横井（[19]）の議論を引き継ぎ、それを（現在の）本分科会メンバーなりに解釈し、書き方マニュアル（[19]）の内容を断片的に引用し、文書・文章ライティングプロセスモデルの立案経緯を辿ろうとしているのである。思考の様式転換という手段が横井の真意を得ているかは分からないが、横井が提唱した文章の書き換えの必要性を棚上げにした訳でなく、寧ろ、その重要性を深く理解しようとする立場である。

基本的には、横井の書き方マニュアルが文章構造の操作のみで事態叙述の違いを処理しようとする立場であるのに対し、（目下の）本分科会は思考様式の違いの分析と解釈にも踏み込んでいただけのことである。というのも主査の力量不足を棚上げするつもりはないが、文段（パラグラフ）の書き換え規則を文章表現の形態・構造操作をもって試みたが、暗礁に乗り上げた。文脈の長短に拠り、十分な文脈を踏まえた対応をしようとすると言い換えの手続きが変るなど、変換条件の曖昧性・不均質性に由来した規則の不安定さを解消することができなかった。

横井の提案は、言語の叙述の仕方における思考特徴の性質や効用を説明するもので、思考の様式やその内実、表現性質の還元的理解を説明するものではない。しかしながら思考様式と叙述の仕方を、思考様式の根本にむすびつけて議論することに反対はしないだろう。

横井の考えは、鈴木（[30]）のいう言語戦略の必要性や重要性を背景に持つ。その実、思考法の転換こそが根本の目的であったのではないかと思いたい。それは現代的な意味での呪術であるかもしれない。『呪術とは、あることをなせば、一定の願望する結果を生ずると考えることで、その意味では科学と同じ思考である。』（[17]：38頁）との指摘のように、いつの時代でも、そして媒介するメディアの違いがあろうが人の集団にあって言語運用の中に呪術的表現がみられる（[4]）。

理想の思考法とは、書き手自身が叙述された事柄の中の考え方の本質を見抜き、そして読み手の思考様式に適合する表現で伝えることだろう。それが読み手に伝わる

と、読み手は伝えられた内容から新しい価値を生み出すことができるのではないだろうか。

文章の書き換えが表層的な所作（表現特徴を取りかかりとした叙述変換）でないことは、いまさら申すまでもないことで、表現の書き換えで思考内容が目論見通りに伝わると考えるひとはいないと思う。どれだけ近似するかの技法が問われるわけで、本分科会が進める立場は、それはレンマ的思考からロゴス的思考への転換、すなわち空間連続から時間連続への注意転換であり、網の目のようにつながりをもつ対象の順序関係からすべての対象が一直線上に並ぶイメージへの視点転換であり、「なる」的叙述から「する」的叙述への表現転換である。

参考文献

- [1] 佐野洋, ビジネス文書の書き方読本 (3)―産業日本語研究会ライティング分科会編について, 一般財団法人日本特許情報機構 Japio YEAR BOOK 2025.
- [2] 特許情報研究所, 令和7年度 産業日本語研究会報告書「産業日本語」, 一般財団法人日本特許情報機構, 2026.
- [3] S.I. ハヤカワ著, 大久保忠利訳, 思考と行動における言語, 岩波書店, 1985.
- [4] 井筒俊彦著, 小野純一訳, 安藤礼二監訳, 言語と呪術, 慶応義塾大学出版会, 2018.
- [5] 佐野洋, ビジネス文書の書き方読本―産業日本語研究会ライティング分科会編について, 一般財団法人日本特許情報機構, Japio YEAR BOOK 2023.
- [6] 特許情報研究所, 令和4年度 産業日本語研究会報告書「産業日本語」, 一般財団法人日本特許情報機構, 2023.
- [7] 特許情報研究所, 令和5年度 産業日本語研究会報告書「産業日本語」, 一般財団法人日本特許情報機構, 2024.
- [8] スティーブン・マンフォード, ラニ・リル・アンコム著, 塩野直之 谷川卓訳, 哲学がわかる因果性, 岩波書店, 2017.
- [9] 横山紘一, 唯識の思想, 講談社学術文庫, 2016.
- [10] 末木剛博, 日本思想探究 論理と構造, 春秋社, 2015.
- [11] 特許情報研究所, 令和6年度 産業日本語研究会報告書「産業日本語」, 一般財団法人日本特許情報機構, 2025.



報機構，2025.

- [12] 池上嘉彦, “「する」と「なる」の言語学 言語と文化のタイポロジーへの試論,” 大修館書店, 1981.
- [13] 山内得立, ログスとレンマ, 岩波書店, 2015.
- [14] 中沢新一, レンマ学, 講談社, 2019.
- [15] 末木剛博, 東洋の合理思想, 法蔵館文庫, 2011.
- [16] 大塚柳太郎, ヒトはこうして増えてきた 20 万人の人口変遷史, 新潮社, 2015.
- [17] 鈴木秀夫, 超越者と風土, 原書房, 2004.
- [18] 志賀浩二, 数学という学問 I, ちくま文芸文庫: 筑摩書房, 2011.
- [19] 日本語マニュアルの会, “日本人のための日本語マニュアル (暫定第 1 版),” 11 2018. [オンライン]. Available: <https://sites.google.com/view/nihongomanual/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>.
- [20] アンリ・ベルクソン著、原章二訳, 思考と動き, 平凡社ライブラリー: 平凡社, 2013.
- [21] ケレイブ・エヴェレット著、屋代通子訳, 数の発明 私たちは数をつくり、数につくられた, みずす書房, 2021.
- [22] 海部陽介, 人類がたどってきた道 “文化の多様化” の起源を探る, NHK BOOKS: 日本放送出版協会, 2005.
- [23] ロマリク・ジャネル, “山内得立の哲学 一東西思想の包括的乗り越えの試み一,” 京都大学人文科学研究所, 2024.
- [24] 内井惣七, 空間の謎・時間の謎 宇宙の始まりに迫る物理学と哲学, 中公新書: 中央公論新社, 2013.
- [25] 嶋田総太郎, 脳のなかの自己と他者 一身体性・社会性の認知脳科学と哲学一, 共立出版, 2019.
- [26] 日本認知心理学会監修、太田信夫、巖島行雄編, 現代の認知倫理学 2 記憶と日常, 北大路書房, 2011.
- [27] 山田歩, 選択と誘導の認知科学, 新曜社, 2019.
- [28] 北山忍, “文化が違えば、心も違う?—文化心理学の冒険,” 岩波書店, 2025.
- [29] リサ・フェルドマン・バレット著、高橋洋訳, 情動はこうしてつくられる, 紀伊国屋書店, 2019.
- [30] 鈴木孝夫, 武器としてのことば 茶の間の国際情報学, 新潮選書: 新潮文庫, 1985.

